**＜文化財の種類**　**有形文化財（書跡・典籍）＞**

|  |  |
| --- | --- |
| **名　称** | 　 |
| **員　数** | 　4461巻24帖２枚 |
| **所在地** | 河内長野市天野町996番地 |
| **所有者** | 宗教法人 天野山金剛寺 |
| **年　代** | 　平安時代前期から江戸時代中期まで |
| **説　明**〇概要金剛寺一切経は、天野山金剛寺（以下、金剛寺。河内長野市）が所蔵する4461巻24帖２枚１にて構成された、まとまって伝来する府内唯一の写本一切経である。本一切経は、鎌倉時代前期から中期にかけて金剛寺およびその周辺地域の寺社等にて書写した経巻と、既に平安時代以来各所にて書写されていた経巻を併せることで形作られた。この中には、中国唐代の経巻に基づく本文をとどめる奈良時代写経を転写した経巻も多数含まれる2。〇金剛寺における一切経の書写　一切経とは、体系的に集積した数多の仏教経典のことで、経・律・論の三蔵のみならず中国の高僧らが著した中国撰述の注釈書類等も加えた、仏教典籍の集大成というべき経典群である。　金剛寺は、行基の開創で、空海修行の地とされるが、その後荒廃する。金剛寺の再興は平安院政期のことで、（1136～1207）が弘法大師空海のを始めたと伝わる承安２年（1172）、あるいは金堂が建立された治承２年（1178）とされる。金剛寺一切経の書写事業は、『』の奥書に「承元第二年六月七日、於河内国金剛寺書写已畢」と記されることから、阿観の没した翌年となる承元２年（1208）に開始されたと考えられている。以降、嘉禎３年（1237）を最多として書写奥書を有する経巻が多く見いだされ、建長３年（1251）より後は急速に書写にかかる奥書が見えなくなる。このことから、金剛寺を拠点とする書写事業は承元２年に開始、嘉禎３年頃に最も活発な書写活動がなされ、ほどなく大部分の書写が終了したとされる。金剛寺の山内における書写場所として、北房、東谷、塔本房、如意院、北谷不動院、中院、極楽院、光明心院などが奥書から確認できる。こののち、文永10年（1273）年に「金剛寺安置一切経之内、未加点之間、（中略）、仍加点而納寺」と記された『 巻六』の奥書のごとく、加点にかかわる奥書が現れる。この頃には金剛寺に整えられた一切経を用いて、訓読のための訓点を付すなど修学のなされたことが知られる。また、南北朝時代の文中元年（1372）に『』巻第五十三および巻第五十五などが補写されたこと、江戸時代中期の正徳４年（1714）には『経』や『摩訶般若波羅蜜道行経』『小品般若波羅蜜経』などが修理のうえ折本に改装されるとともに、欠本は黄檗版をもって補写されたことなどが奥書より判明する。長きにわたって整備や護持のなされてきたことがうかがえる。 ○金剛寺周辺寺院における書写　本一切経には、金剛寺周辺地域の寺院などにて書写された経巻も数多く伝存する。奥書に「金剛寺一切経内」などと明記される事例として、貞応３年（1224）に和泉国南郡山直郷の大日寺（岸和田市）にて書写された『 巻第十一』『雑一阿含経 巻第二十』や、嘉禎２年（1236）に同国塩穴郷石津村の念仏寺（堺市）にて書写された『』『 巻第四』、同３年に同国和田郷下条菱木村（堺市）の釈尊寺にて書写された『 巻第十』、同年に同国泉郡上条郷豊中村（堺市）にて書写された『巻第三』などがあげられる。金剛寺にて書写を進めると同時に、各所に散在する貴重な仏典の写本を求め、周辺地域の寺院などにて書写を行っている様子がうかがえる。このほか、奥書などに金剛寺一切経とは記されないものの、同時期に書写され、金剛寺に伝えられた経巻も数多く存在する。例えば、河内国内において書写された経巻として、寛喜２年（1230）に錦部郡宇礼志郷の結縁院（富田林市）にて書写された『 巻第一』や、嘉禎３年に丹北西条郡矢田部郷の善福寺（大阪市）にて書写された『 巻第五十三』などがある。また、和泉国内での写経として、嘉禄３年（1227）に大鳥郡の長承寺（堺市）にて書写された『 巻第三十一』や、貞永元年（1232）に日根郡淡輪辺（岬町）で書写された『 巻第二十二』、嘉禎２年（1236）に土塔山（堺市）にて書写された『 巻第五』、そして同３年に泉郡の槙尾寺（和泉市）にて書写された『 巻第十八』『広弘明集 巻第十八』、向井村（堺市）にて書写された『』、和田郷下条の栄多寺（堺市）にて書写された『 巻第十』、日根郡近木の地蔵堂（貝塚市）にて書写された『一切経音義 巻第四』などが伝存する。〇平安・鎌倉写経の収集金剛寺一切経は、そのほとんどが鎌倉時代に書写された経巻で構成されている。しかし、この一切経中には、阿観による金剛寺の再興期、あるいは書写事業の開始時期を遡る年代を記した、書写や校合の奥書を有する経巻も見いだすことができる。特筆すべきものとして、本一切経中にて奥書から書写年代が判明する最も古い経巻である承暦３年（1079）書写の『大般若波羅密多経 巻四百』を含む大般若経約三百巻や、保延５年（1139）書写の『』など僧快尋が発願した一切経の一部、応保２年（1162）書写の『』など大鳥郡深井郷（堺市）八田寺の一切経の一部、そして建久７年（1196）書写のなどを含む僧栄印発願の紀伊国神社とみなされる天野宮一切経の一部などが挙げられる。このほかにも、長承４年（1135）に和田郷中条（堺市）の行院野々井寺住僧らが書写した『 巻第三十五』や、康治２年（1143）に常楽寺（堺市）の御塔供養料経として書写された『 巻第三十八』なども伝わる。また、書写の年紀は記されないものの、もう一組、字体や料紙といった形態から平安時代前期の書写と判断される大般若経約六百巻も現存する。これらの経巻は、13世紀初頭から金剛寺にて一切経書写事業が進められる間、既に平安時代以来書写され存在していた経巻の施入もしくは収集もなされたため、金剛寺に伝来したと考えられている。〇金剛寺一切経と奈良写経　金剛寺一切経中には、いわゆる古逸経典が遺存することも注目される。例えば、本一切経中より見いだされた後漢代の安世高訳『』は、隋代の仁寿２年（602）に成立した『』で既に欠本と記されており、７世紀初頭には散逸していた経典であった。また、安世高訳『』をはじめとして、『』『』『』『』などは、現在流布する10世紀以降に成立した宋版や高麗版といった刊本一切経系統の文言と大きく相違する異本であり、その文言は奈良写経である正倉院本と多く一致することが明らかにされている。奈良時代の写経は、隋・唐代の本文を反映しており、写経とも親近性を有するとされる。金剛寺一切経は平安時代以降に書写された写経であるが、しかし、そのとして奈良時代の写経もしくはその転写本を用いたものが存するため、宋版や高麗版といった刊本とは異なる経典や本文を伝えているとされる。〇評価　金剛寺一切経は、その大半が平安時代から鎌倉時代中期にかけて金剛寺および周辺地域の寺社などにて書写された経巻で構成される、まとまって伝わる府内唯一の書写一切経である。本一切経には、書写や校合などの奥書が数多く記されており、書写の年代や場所、人物そして願意などを知ることが出来る。このことから、中世における金剛寺史のみならず、河内国および和泉国の地域史や文化史を理解する上で非常に重要である。加えて、僧侶の学問的営為により訓点を付された経巻や、加点年を記した奥書を持つ経巻が存することから、当時の訓読を知ることができ国語学上においても貴重である。また金剛寺一切経は、主たる藍本が奈良時代の写経もしくはその転写本と考えられており、既に散逸したとされてきた経典を蔵することや、宋版など刊本一切経系統とは異なる本文を記す経典を多数含む資料群であることから、日本列島のみならず東アジアにおける仏教学上の資料的意義も大きい。以上より金剛寺一切経は、歴史学、国語学、仏教学などの学術研究上において非常に価値が高いといえ、本府指定文化財にふさわしい。註（註１）金剛寺一切経を構成する経巻のうち、既に国の重要文化財として大正４年（1915）に指定された後村上天皇の奧書を有する『』12巻および大正８年指定の『』１巻、昭和43年（1968）指定の『』１巻は、この員数に含まない。また本一切経中には、同一名の経典が複数巻存在するものもある。（註２）金剛寺一切経は、昭和11年（1936）に東方文化学院東京研究所によってはじめて整理と調査がなされ、その後、昭和40年代半ばには河内長野市史編纂事業で調査のうえ史料編等が刊行されるなど、世に広く知られた存在であった。しかし、長らくその全貌は詳らかでなく、落合俊典氏を中心とした研究チームによる、目録を含む調査報告書（2004、2007）の刊行によってはじめて明らかになった。［参考文献］三好鹿雄「金剛寺一切経全貌」（『宗教研究』13－6、1936）梶浦晋「金剛寺一切經と新出安世高譯佛典」（『佛教学セミナー』73、2001）落合俊典編『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、2004）京都国立博物館編『古写経―聖なる文字の世界―』、2004赤尾栄慶「河内長野金剛寺一切経管見―中間報告にかえて―」（頼富本宏博士還暦記念論文集刊行会編『マンダラの諸相と文化―頼富本宏博士還暦記念論文集 下(胎蔵界の巻)』法藏館、2005）落合俊典編『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』（科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、2007）大塚紀弘「天野山金剛寺一切経の来歴について」（『寺院史研究』15、2016）堺市博物館編『堺・経典をめぐる文化史』、2018堀川亜由美「天野山金剛寺一切経奥書からみる和泉、河内地域の寺院、人物」（堺市博物館編『堺市博物館研究報告』第38号、2019）京都仏教各宗学校連合会編『新編 大蔵経―成立と変遷』法蔵館、2020 |